

---

# ヒカルの碁 神の一手を極めし者

ソウルメイジ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒカルの碁 神の一手を極めし者

### 【Nコード】

N9957Z

### 【作者名】

ソウルメイジ

### 【あらすじ】

ヒカルと別れた佐為はある日突然再び現世へと舞い戻り、ある碁盤に宿る。

その碁盤をもつじいさんの孫であるユウはひょんなことで、幼なじみの小雪とともにじいさんの家に行くことになる。

そこで、その碁盤を見たユウは、ヒカルと同じようにサイと出会い、そこから物語が始まる。

あまり、うまくはできないかもしれませんが、見ていただけるとうれいします。よろしくお願いします

あと、大変申し訳ないのですが、よく編集をいたします。できるだけ、そのようなことをないように心がけてまいります。私もまだ未熟ですので、大目に見てやってください。

それでは、くどいようですがよろしくお願いいたします。

## サイとの出会い

「結局、進藤ヒカルも神の一手には届きそうにない。あの段階ではまだはやかったのだろうか？塔矢アキラも届かぬであろう。これでは私がつまらない。佐為、いま一度そなたを現世へと向かわせる。また新たな私への挑戦者・・・神の一手を極めし者を導いてくれ・・・」

あれ？私はなぜまたココにいる。私の役目はもう終わったはずだ。だからあの時私はヒカルの前から姿が消えた。ならばなぜ再び私はココにいる。

人のいる現世に・・・  
どうして私は再びどの誰のものかもわからない碁盤に宿っているのだ？

わからない、だがきつと神様が再びこちらへ来てもいいと、そう思われたのだろう。

だったら、また私は待つ。虎次郎やヒカルのように、私を見つけてくれる人が来る日を・・・

「・・・きて・・・ねえ、起きてっば」

「・・・はっ！、おい、テストは？」

「とっくに終わったわよ、バカねえ、なんでテスト中に爆睡なんて

するのよ」

しまったあ、今日は真面目に受けようと思っていたのにと早坂ユウは後悔していた。

「あんだ、補習行き確定ね」

「そういう小雪だつて、いつつもま・じ・めにテスト受けてても補習ばつかじゃん」

「あんだだつてかわないでしょ」

「そんな事ねえよ、俺はテスト今日みたいに真面目に受けねえから補習なんだよ。お前と一緒にすんな」

今の発言にイラツと来た小雪がユウの席の机をバンと叩く。

「結局補習なんだから一緒にじゃないっ！」

それに負けじとユウも椅子から立ち上がって反抗する。

「一緒にねえよ、俺がテストを真面目に受けたら補習はおるか、学年で一桁取れる点数だつてとれるぜ」

「いつたわねえええ」

「ああ、いつたぜ」

白熱した二人の仲に、一人のクラスメイトが

「おいおい、夫婦漫才はその辺にしておけよ」

といい、クラス中に笑いが起こった。

だが、二人はまだまだ納得できていないようで、フンツとお互いにそっぽを向いていた。

その日の授業が終わるころには二人はすっかり仲直りして、元の仲のいい二人の戻っていた。

というのも、この二人は家はとなり通しで、幼稚園そして、今通っている小学校でも6年間で一度もクラスが違わなかったというほど何もかもが一緒なのだ。

家が隣ということは当然下校も同じ道になる。さらにユウと小雪の

地域には6年生がユウと小雪二人しかいないため、二人での下校も当たり前となっていた。

いつものようにランドセルをもった小雪がユウの方へとやってくる。

「ユウ、帰る」

満面の笑顔でユウに向かって微笑みかける小雪。

「悪い、今日はちょっとジーちゃんのところにいこうとおもってるんだ」

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、私もつれてって」

さも、当然のように自分もつれ行くように言う小雪。

「なんでお前、ジーちゃん家なんて行きたがるんだ？」

「最近、顔だしてなかったし、せっかくユウが行くんだったら私もいこうかなって思ってたさ」

ユウのおじいちゃんである早坂源次郎の家は、ユウの家から歩いて5分という位置にある。源次郎は、誰にでも愛想がよく、幼稚園のころからユウとよく遊んでいた小雪は毎日のように

源次郎にの家に顔を出していた。当然ユウも一緒に、だ。だが、最近では学校も忙しく、しばらく二人とも顔を出していなかったのだ。しばらく考えた後で、特に問題ないと見たユウは

「じゃあ、行くか」といった。

それに続いて小雪も笑顔で

「うんっ！」

とうなずいた。

外は6月だというのに夏本番といったように暑かった。

その暑さに耐えながら二人は学校からしばらく歩き、ようやくユウと小雪は源次郎の家に到着した。

久しぶりだったからと言って特に道に迷うことなくすんなり来ることができたのは、本当に幸いだった。

ユウがチャイムを押すと、中から、「はい、今行きます」としわがれた声がユウたちに聞こえ  
その声は、小さいころから何も変わっていない、全てを包み込むような優しい声だったので一発でその声の主が源次郎だと二人はわかった。

声が聞こえて数秒後、ガラガラとドアが開いた。

そこから姿を現したのは、体つきはやや小柄で前かがみになっていて、髪の毛が見事に真っ白な

おじいさんが立っていた。源次郎だ。

源次郎は二人の顔を見ると、すこし驚いたようだったが、それでも優しい表情はくずさずに

「おお、ユウ、それに小雪ちゃん。いらっしやい。」と言った。

それに対して二人も

「ただいま、ジーちゃん」

「こんにちは」

とあいさつ。

「うちにお入り。外は暑かろう。アイスをだしてやる。」

その言葉を耳にした二人は、

「やったぜ」

「やったあ、うれしい」と口ぐちに喜びを言葉にしながら中に入った。

家に入ってユウと小雪はリビングに、源次郎は台所へと向かった。リビングについた二人が目にしたのは、碁盤だった。

テーブルが部屋の真ん中に置いてあって、そのすぐ右隣りに碁盤がカバーをかぶせられておいてあった。

今まで、この家に来たときにそんなものがあつた記憶の無い二人に

とってこれは、大きな驚きだった。

と、同時に疑問でもあった。ジーちゃん「おじいさん」の家になものあったかな？と。

しかし源次郎が台所からアイスを取って二人のもとへ来ると二人はすぐにそんな事なんか忘れて、アイスへと走っていった。

真ん中に広がる6人はすわれそうなかいかい机でアイスを食べ終えるとききの疑問が再びユウの頭をよぎり源次郎にその疑問をぶつけることにした。

「ジーちゃん、この台いつたい何に使うの？」

「ああ、それはのう、碁盤というものじゃ。そのカバーをとってみい」

そういつて碁盤をさす源次郎。碁盤のことをなにも知らないユウはこれを取ったらなにかでてるのではないか、と思い面白そうという反面、怖いという感情の狭間から恐る恐る碁盤のカバーを取った。すると、そこには無数の傷のついたますめ361ある一般用の碁盤があった。

「ボロボロじゃん。なんでこんなものにカバーなんてかけてるんだよ」

そういつてユウは、がっかりするようにカバーを碁盤にかけなおした。

すると、小雪と源次郎はユウが何を言ってるのかわからないと言った表情を浮かべた。

「何を言っておるんじゃユウ。この碁盤は先週買った新品じゃぞ。

ほらこの通りピカピカではないか」

そういつてもう一度カバーを取る源次郎。

しかし、ユウにはどこをどう見ても古びた無数の傷をもつ碁盤にか見えなかった。

すると、突然、ユウの心の中にある声が聞こえた。

この碁盤がボロボロにみえるのですか

「だからそういつてるじゃん」

あなたには私の声がきこえるのですか  
えっ!?!とユウは思った。今の声はいつたい誰だ、と。

私の声が聞こえるのですね

ユウは不安になって「誰だっ!?!」と声を上げ立ち上がった。

ユウのその様子に小雪と源次郎は不審感を抱き

二人して懸命に「ユウどうしたのじゃ」

「どうしちゃったの、ねえユウってば」とユウに呼びかけている。

しかし、不安でいっぱいであるユウにその声が届くことはない

見つけた。ようやく見つけた。

どこか喜んでいるかのように聞こえるその声はユウの不安をさらに  
増加させた。

思わず、身構えるユウ。

その様子を冷静に、見た源次郎は

「救急車じゃ。救急車を速くっ!」と小雪に叫ぶ。幻聴を聞いている  
と思っっているのだ。

あまねく神に感謝します。

すると、急に碁盤が光だし（ユウにしか見えていない）昔の白い衣  
装に身を包んだ一人の男の姿が、ユウの前に突然現れた。

そこで、ユウは気を失った・・・。

## サイとの出会い（後書き）

どうでしょうか？ヒカルの碁 神の一手を極めし者 楽しんでいただけただけでしょうか。

また、まだまだ初心者で拙い部分もあるかと思いますが、頑張っていると思っています。よろしく願います。

## プロフィール

? 名前 早坂 ヨウ

年齢 12歳 (小学6年生)

身長 147cm

体重 36kg

特徴 髪の毛は少し長めで左腕にミサンガをしている。  
運動が得意 勉強が苦手

好きな食べ物 オムライス

嫌いな食べ物 ゴーヤ、ピーマン

家族構成 ひとりっ子、両親は健在

父親は部長 母親はヘル

パー

? 名前 夢咲 小雪

年齢 12歳 (小学6年生)

身長 139cm

体重

ひ・み・つ？

特徴

つけている。

ユウの幼なじみ。ユウとは逆で右腕にミサンガを

ポニーテールで、気が強い。

好きな食べ物

基本的に甘いものなら何でもOK

嫌いな食べ物

しょうが、漬物 梅干し

家族構成

妹が1人 両親ともに健在。父親は単身赴任

中

母親は主婦

？  
名前

早坂 源次郎

年齢

63歳

身長

148cm

体重

43？

特徴

髪の毛が真っ白。小柄で、頭がキレる。暮の経験あ

り。

年中にここにいる

好きな食べ物

刺身、漬物

嫌いな食べ物 カレー、ハンバーグ

? 名前 中原 優香

年齢 27歳

身長 164?

体重 いうわけないでしょっ!

特徴 口調がかかるくだれでも話しかけやすい雰囲気を持って

いる人

進藤が経営する暮会所で受付をやっていて、その子  
供たちからは中原さんと呼ばれている

茶色にそめた髪もすこし特徴的

好きな食べ物 なんでも好き

嫌いな食べ物 特になし

## 暮会所

・・・お前は誰だ？

私？私は藤原佐為平安の都で貴族に囲碁を教えておりました。

囲碁？ってあの台でする何かのことか？って平安っ！？ってことは  
お前

はい、あなたの想像通りです。

何の未練があつて俺の前に現れたんだ？

私にもそれはわかりません。以前私は進藤ヒカルという者とともに  
囲碁をしておりました。

しかし、途中で私の役割は終わり消えてしまったはずなのです。

ふーん、で今度は俺に囲碁をさせたいってか

はい！囲碁はわたしにとっての幸せそのもの。打てなければ死ん  
だも同然です。

お前もう、しんでるけどな

それに・・・私自身、望みが捨てきれないのです。神の一手を  
極めるといふ、望みを・・・

そこで、ユウは目を覚ました

気が付くと、ユウは自分のベッドで寝ていた。丁寧にパジャマにまで着替えさせられている。

結局昨日何が起こったのか覚えていないユウはとりあえずいつものように準備をして学校へ行くことにした。

母親には「あんた、今日一日は休みなさい。また急に倒れられても困るし」と言われたが、ユウにしてみれば一日中

部屋でゴロゴロしているほうがよっぽど退屈で学校へ行っているより倒れそうだったので「大丈夫だって」と言っ

準備を開始した。

ちょうど準備が終わったところ、家にチャイムの音が鳴り響いた。

多分小雪が鳴らしたのだろう、あいつ、いつも見計らったようにいいタイミングできてくれるもんなあとユウは苦笑しながら思う。

ランドセルを背負って、行ってきまーすと大声で叫び玄関のドアを開けるとそこには、やや不安げな顔をした、普段と同じくポニーテ

ールの、真っ黒のTシャツにショートパンツ姿の幼なじみである夢

咲小雪の姿があった。

小雪はユウの姿を見るなり、大丈夫？と尋ねてきたが、もう平気。

元気だぜとユウが言っていると小雪の不安げな顔も笑顔に変わり、また二人で登校した。

学校につくと、いつものようにクラスメイト達が「相変わらず、仲睦まじいカップルだねえ」とヤジをとばし、それに対して必死に批判しているうちにHRの時間になり、その日の授業が始まった。

2時間目が終わったころ、小雪が妙に威張った顔をして、女子の輪を抜けてこちらの方に寄ってきた。

ユウは、嫌いな授業ばかり2時間続いたので、もうくたくたと言っ

た感じに机にへばりついてた。

「ユウ、あんた昨日いったわよねえ」

妙に悪女らしい行動をとり今にもおーほっほっほと叫びそうな雰囲気を出している小雪。しかしそんなことに構う気力もユウにはなくテキトーに「なにが？」とだけ返した。

すると、小雪は自信に満ちた表情で

「昨日アンタ、俺が本気を出せば、学年で一桁にだって入ることもできるう、とか言ってたわよね？」

「ああ、言っただけ」

この時ユウはもうすでに半分寝ており、小雪の話など耳にも入れていない。

「3時間目、社会テストなんだけど」

「入れる、入れる」

「あ、そう。そこまで自信があるなら見せてもらおうじゃない。」  
つまらなそうにして、帰っていく小雪。多分ユウの慌てふためく態度でも見たかったであろう。

その後、小雪は再び女子の輪に戻っていき、昨日ユウがね……と昨日のことを説明した後にユウのやったこと〜と言って「だ、誰だ!？」といわざとらしく拳動不審の演技をして女子全員で大笑いしていた。

そして、しばらくしてキーンコーンカーンコーンという小学校独特のチャイムがなり3時間目のテストが始まった。

ユウはテストが配られ始めてから、初めてさっきなぜ小雪が自分に対してなぜあのような行動をとったのかを理解した。

さっきは、これのことを言っていたのかあ、まじーなあ、俺、社会って苦手なんだよなあ。でもあいつが言い訳を聞くわけもないだろうし、とテスト開始10分ずつと頭を悩ませていた。

すると、再びまたあの声がユウに聞こえてきた。

ほう、歴史の問題ですかあ、と。

ユウは再びあの時のことを思い出して、一瞬あたり一面を見回した。

すると、昨日見た昔の白い衣装に身を包んだ髪の毛の長い一人の男がユウの左後のほうから、テストに顔をのぞかせている姿を見つけた。左後ろを直視しているユウのその姿を見た先生が

「いくら補習が嫌だからってカンニングはだめですよ、早坂君」といい、テスト中にも関わらずクラスが笑いで包まれた。

ユウは、顔を真っ赤にしながら「す、すいません」と言っつて、再びテストに顔を戻した。

その姿を隣の席から見っていた小雪はくすくすとわらい再びテストに視線を落とした。

ユウはテストを何とか解きながら佐為に向かって話しかけることにした。

（昨日のアレ、夢じゃなかったのかあ）

はい。

（で、お前誰だっけ）

佐為です。

（佐為かあ。でも悪いな。俺、暮なんて全然しらねえし、やる気もサラサラねえんだ）

この時、佐為は初めて出会ったころの進藤ヒカルのことを思い出していた。

ああ、あの時もまさに歴史のテスト中だったなあ、と。彼も初めは暮なんて全く知らない子でしたが、今、彼はどうしているのでしょうか。まだ暮を続けているのでしょうか。というより彼はまだ生きているのでしょうか

ユウ、今は西暦何年ですか

（なんでそんなこと聞くんだ？へんなやつだなあ。たしか2012年だったと思う）

2012年・・・私とヒカルが分かれたのは2000年ちょうど。

ということ、まだヒカルは生きている可能性がある。塔矢アキラとしてのぎを削り、盤上の上で戦っているのでしょうか

と、佐為が物思いにふけっている最中、テストのペンが止まったユウが無理だろうと思いつつ佐為に質問をしてきた。

(なあ佐為。老中の松平定信が行った改革って知ってるか?)

ああ、それは寛政の改革ですね。私も一度彼と暮を打ったのですが抜け目のない、しっかりしたお方でした。

(じゃあ、日米修好通商条約結んだ人物って誰だかわかる?)

井伊直弼様ですね。あの時は皆彼を恨んでおりましたが、いずれは誰かがしなければならぬ選択を彼が早めに手を打ったというだけのこと。選択の速い竹を割ったような性格の方でした。

ここまで来てふとユウは思った。こいつにテストを答えさせたらマジで学年で一桁に行けるんじゃないかねえか?でも、ただただ佐為に答えさせるだけじゃ佐為がかわいそうだしなあ。そうだ、佐為は確か暮が打ちたいって言ってたよな。

よし、そうだ。それにしよう

(なあ佐為。俺と取引しようぜ)

取引?

(ああ、お前は歴史と国語のテストを解け。代わりに俺はお前の暮にたまになら付き合っただけ)

それは、ほんとですかっ!

思わぬ幸運に佐為は喜びを隠せずにいた。佐為の顔が次第に笑顔になっっていく。

(ああ、じゃあ後の問題よろしく)

はい、頑張りますっ!

こうして、3時間目のテスト無事終わった。後日張り出された結果では、見事ユウは100点を取り、学年1位に輝いた。

その日の授業が終了し、ユウは小雪に「俺、今日先に帰るわ」と一言告げて、佐為との約束を果たすべく、学校から最寄りの暮会所へと向かった。

暮会所の前についたユウは初めての場ということですからこし緊張していた。

しかし、佐為が頭の中で早く、早くと騒ぐので緊張を押し殺して、中に入った。

中に入ると、すぐ正面に受付があり、そこには一人の普通のどこにでもいそうな服装をした中原優香という名札を下げた女の人が立っていた。

ユウは、とりあえず頼れる人が欲しかったため、いち早く受付に向かっていった。

すると、中原も初めて見る顔なことで背が小さいことから小学生であることと、見ない顔ということから初めてだと察してくれたのか、声をかけてきてくれた

「坊や、今日が初めて？」と

ユウもその優しいげな声に落ち着きを取り戻し、「うん」とうなずいた。

続いて中原が

「じゃあ、小学生の間はあっちよ。あ、ここ小学生と初めての人は無料なの。進藤先生が経営されていてね、暮会所ってけむったいおっさんが集まっているイメージが強いだろ。だから小学生とかいきづらいじゃん、それで小学生でも棋院じゃない、気軽に本気で打てる場所が必要だ、とか言っただけで作っちゃったの。まったく変わった先生よね」

その言葉を聞いて佐為はビックリした。進藤つてもしかしてヒカルのことなのか、と。気になって仕方が無い佐為はユウに進藤つて名前はなんなのですか、と尋ねるように頼んだ。

中原が優しそうだということもあり、ユウはその頼みを快諾。すぐに中原に進藤という人の名前が何なのかを聞いた。すると、中原は、

進藤って言えば、進藤ヒカルじゃない。今2冠を取っているあの進藤名人を知らないの？ほら、あの5冠を取って謎の引退をした塔矢行洋の息子の塔矢名人と小学生のころからライバルだったって言われてて囲碁界の期待の若手2トップス。あなた本当に何も知らないのね。とすこしあきれたように答えてくれた。

そのことを聞いて佐為はうれしくて仕方なかった。ヒカルが、あのヒカルがもうプロでそんな事を言われるほどすごい人になっていたなんて、と。ぜひ一度今のヒカルと打ってみたい、そう思った。しかし、その願いは簡単にはかなわないもの。かつてヒカルといたときに塔矢行洋と戦いたかつたのと同じ位置に今、彼はいるのだ。

佐為の願いが簡単になわれないものと分かったところで中原が案内するわ、ついてきてとユウを促し、それにユウと佐為も続いた。

## 天才棋士誕生

着いた先に広がる光景を見てユウは息をのんだ。

自分と同じ年くらいのこどもが真剣に必死になつて碁盤を見つめて  
いるのだ。碁を全く知らなかった人間からすれば、異常以外の何物  
でもない光景であろう。さらにそれが横3×縦5で部屋に並べられ  
ているのだ。こうなつてくれば迫力さえある

これが、囲碁なのか・・・とユウは感嘆していた。

そんな驚いているユウが、何度見てもヒカルに重なつて見える佐為  
は、その姿を微笑んでみていた。

部屋について少しした後、中原がしゃがんでユウと同じところまで  
視線を下げてユウに質問をした

「ねえ、坊や。棋力はどのくらい？」

「棋力？何それ」

ユウのその言葉を聞くと中原はなるほど、と言つつぶやき部屋の中  
へと案内してくれた。

「じゃあ、一番奥のあの子と打つてきてもらえる？この部屋勝ち抜  
き戦形式になつててね、最後一番手前だった子がチャンピオンつて  
わけ。5連続でチャンピオンになると進藤先生と特別に指導碁が打  
つてもらえるのよ。じゃあ、がんばつてね」

そういつて、中原は受付の方へと戻つていった。

ユウも指を差された席を目指して歩き出した。

（よし、じゃあ行くか。佐為）

ええ、必ず、チャンピオンに5回連続なりましようっ！

（何張り切つてんだ？おれ5日も連続できたくねえよ）

そんなあ・・・

（今日打てるだけでも感謝しろよ。ほら、行くぞ。）

はい・・・

露骨にへこむ佐為。その姿を見かねたユウは

（気が向いたら明日も来てやるよ。まったくわがままだなあ、佐為は。）と佐為に言っておげた。  
すると、佐為はペアと花が咲いたように笑顔になり  
ありがとうございますっ！  
と、言っておウの後を追った。

ユウが座った席の相手は、小学生でも低学年層くらいの人間だった。ユウが席に座ると、その相手の子はいそいそと準備をしながら、ユウが何もしなくても準備は完了した。

そして相手の子が

「僕がにぎるね」と笑顔で言ってくるのでユウも

「あ、うん」と返すことができず、やむなく佐為に（振りこまってるんだ）と聞いて

それが、初めて戦う相手または、棋力が同じ相手の場合に先手、後手を決めるときに使う将棋で言う振りこまのようなものと知った。ユウは偶数であると予想し、台の上に二個石を置いた。そして、相手の子が手をパーに広げて、数を数えてみると奇数だったため、相手の子先行で碁が始まることとなった。

そして、お互いに

「よろしくお願いします」

と言って碁がスタートした。

相手の子が晩に石を打つパチツという音がユウの耳に響く。

（おい、佐為。相手は子供なんだ。手え、抜けよ）

わかってますって17-4右上隅小目

えーっと17の1,2,3あった。そうして佐為の言う17-4を見つけてユウはパチンツと張りのいい音を出して石を置く。  
するとその打ち方に驚いた佐為が

ユウ、あなた本当に碁を打ったことがないのですか？

（え？ないけど。）

だって、そのうち方・・・

（ああ、これはさつき一番手前で打ってたの見てかつこいいなあと思っただからマネしてみただけ。どう似てた？）

ああ、この子もまたヒカルいや、ヒカル以上に才能を持った子なのだと分かったとき佐為はふとヒカルと別れた時のことを思い出して切ない気持ちになった。もしこの子がヒカルのように自分で碁を始めるようになって強くなったなら、また私は消えてしまうのだろうかと考えたからだ。だが、自分のわがままを通すわけにはいかない。せつかく素晴らしい才能を持った子なのだ。もしこの子がヒカルのように、ユウが打ちたいといったなら、私は全力でそれを応援しよう、そう思った。

再び相手の子のパチツと打つ音がユウの耳に聞こえる。

（次はどうするの？）

16 - 17 右下隅小目

えーっと、16の17つと。とのろのろと場所を探しては打つ。それに対して相手の子もまた考えて打つ。

そのような攻防がしばらくの間続いた。

そして、ユウがまた佐為の指示で打ったあと、相手の子の手が急に止まった。そして、だんだんと顔が険しくなっただかと思うと、その直後には吹っ切れたような顔になって、

「ありません」と言った。

また、意味の分からない言葉を耳にしたので、佐為に聞いてみるとそれは相手が自分の負けを認めたということらしい。

相手の子供は言うや否や石を片付けだし、ユウも続いて片付けに入った。

そして、片付けが終わった段階で互いに

「「ありがとうございます」「」と言ってお辞儀をして、ユウは席を立った。

そして、ユウは隣の席へ移動。相手を待っている間佐為と話でもしておこうと思ったユウはそのまま顔を際の方へ見やった。

(なあ、さっきの子強かったのか?)

ええ、とても強かったです。あれが小学生かと思うと将来が楽しみです。

(なあ、この際だからちよつとだけ碁のこと教えといてくれよ。さっきみたいのはごめんだぜ)

教える、と言われましても、私の取って当たり前のことがユウにとつて知らないこともあるでしょうし・・・

(うーん、それ言われると何とも言えねえな。まあ適当に基本的なことと言ったらってやつを教えてください)

でしたら、まずは、ルールですね。

なんとなくわかっていると思いますが、黒が先手白が後手です。次にアゲハマ。これは盤上で相手の石を縦横隙間なく取り囲んだときに取った石のことです。さっきの手合いではありませんでしたが、縦横に相手の石を取り囲んだ場合、自分はその石をとらなければなりません。

あと、まだユウは打たないから心配ないと思いますが、自殺手も禁止です。自分から囲まれたところに行くことを自殺手と言います。

あとは対局時計、これは私もヒカルと打って初めて知りました。これは本当の手合い、例えばプロ試験なんかで使われます。うーん、ほかには思い当たりませんねえ

(まあ、じゃあ俺が必要な知識はそれくらいってわけか。わかった、サンキュウな)

と、ちよつと佐為の説明が終わったところで第二局目の相手が登場した。

今度はユウと同じくらいで小学校高学年くらいの相手だ。

ユウはさっきとは違った機敏な動きで準備を済ませていき

「握って」といって今度は奇数を予想して一つだけを台の上に置いた。相手の握っていた数を数えると9個と奇数だったので、今度はユウが先手だ。

そしてまたお互いに「」よろしく願います」「」といって手合い

が始まった。

手合いは、どれもあっという間に終わっていき、気が付けばユウたちはすでに一番入口側の列にまで突入していた。

しかし、さすがにどれだけ早く終るからといって初めて碁を打つユウにはさすがにこれ以上はきついらしく、ここで一度切り上げることにし、席を立った。

部屋を出ると、ユウにとつての自然な空気が漂っており、思いっきり背伸びをした後、受付に向かった。

中原はユウを見るとユウに向かって笑顔で手をふり、「どうだった？コテンパンにされたでしょ？」と聞いてきた。それに対してユウは自分はただ言われた通りに打っていただけだったので大した感想がなかった。「なんだか、すこし物足りない感じ」と対局途中ですこしだけ佐為が漏らした不満をそのまま口にした。

すると中原は、え！？と驚嘆の声をあげた。その声にユウも驚いたが、さらにその女の人はユウに詰め寄ってきた。

「ちなみに坊や、今日どこまで勝ち上がったの？」

「最前列までは来たと思うけど、それがどうかしたの」

「坊や、お姉さんに初め来たとき、棋力は知らないっていったわよね」

「うん、言ったよ。っていうかそのキリヨクってなに？集中力みたいなもの。集中力が高ければ高いほど強い、とかそういうやつ？」

「そんなとぼけちゃって・・・ってあなた本当に棋力のこと知らないの！？」

「最初からそう言ってるじゃん」

「驚いたわ、棋力も知らない子があの超小学生達に互角以上に戦ってくるなんて。でもあなた最前列まで来たところでぬけだしてきたのよね」

「うん、そうだよ。」

その言葉を聞いて、すこし自信を取り戻したのか、中原は詰め寄る

ような体制を普通の立ったままの体制に戻した。

「なら、まだまだね。一番最前列は別格。他の子たちとは全然実力が違う。プロとまではいかないけど、棋院になら一発で入れてもらえるレベルの子ばかりよ。また次来る時を楽しみにしてるといいわ」その言葉を聞いた佐為がユウに

その子たちなら、多分、私打ちましたよ。ほら、思い出してください。途中で何局か直々に申し込まれた試合があったでしょう？あれ、彼らでしたよ。確かに彼らはすこし厳しい手を打ってきましたねえ。でもまあ、小学校の塔矢アキラよりも数段よかったですけどね。あつという間に終わっちゃったじゃないですか

（塔矢アキラ・・・どっかできいた名前だな。まあ今はそんな事どうでもいいや。今日はもう打てる気がしねえ。口がすべらねえうちに帰るぞ。佐為。それにお前なあ、ちよつとは手加減しろよ。なんでそんな本気で打ってるんだよ。そんなことするから、こうしてからまれるんだぞ）

はい、反省してます

（今後、こんなことはないように、何回かに一度は負けてくれよ）

そんなことしたら、ヒカルと碁が打てないじゃないですか

（お前、どうしてそんなに進藤名人と対局したがつてるんだ？つてこの話はあとでにしよう。ここにいとれそれの佐為が強い人たちも倒しちゃったつてことがばれちゃうからな）

「じゃあ、お姉さん、俺帰るよ。今日はすこし対局しすぎて疲れちゃった。」

「うん、じゃあね。また来るのを待ってるわ。次の相手は覚悟しておきなさいよ」

そういつてユウと佐為は碁会所を後にした。

ユウが碁会所を後にした後、中原のもとへ、中原が別格と呼ん

る男の子たち4人がやってきた。

「あら、あなたたち。どうだった、新しい坊やは。あれはかなり強いわよ。あなたたちも覚悟しておかないとね」

中原の言葉に4人の中で一番女の人に近かった男の子が顔を俯けながらいった。

「中原さん、俺たち、あいつにもう負けたんだ」と  
そのことを聞いて、中原も

「なんですって!」とさつきよりもさらに大きく驚き、まるで雷が落とされたように固まった。

すると、また別の男の子がしゃべりだす。

「あんまり強い強いつてみんなが言うからさ、俺たちちよつとした合間を作って打とうぜって言ったんだ。そうしたら

あっという間に・・・」

「いったい何者なのかしら。彼、棋力のこと知らないのよ」

彼女の言葉に4人全員が

「・・・ええっ!」「・・・」

と、一斉に驚く。てつきり、院生かなにかだと思っていたのだから無理もない。

「これは、進藤先生にも連絡しておかないといけないわね。この碁会所に天才が来たよ」

ヒカルとの思いで・・・

暮会所を出た後、ユウ達は寄り道することなくまっすぐ家に帰った。家に帰った後、ユウは親にただいま、とだけそっけなく言っただけで自分の部屋へと向かった。

部屋に向かってまずユウは自分専用のノートパソコンを開いた。次のテストで一桁に必ず入るといふ条件付きで買ってもらったのだ。逆に一桁に入ることができなかつたら、パソコン没収はもちろんのこと、一年間すべての洗い系（風呂洗い、皿洗い、洗濯物など）はすべてユウの仕事になるのだが、苦手教科である歴史と国語が100点をとれるのだ。正直そんな条件、ユウにとっては痛くもかゆくもなかつた。

そのパソコンを見た佐為は

それは、いつぞやの暮の強い箱ではありませんか。それにしても以前見たものとは違い薄いですねえ

（へえ、佐為、お前パソコンで暮打ったことあるんだ。これを買ってもらえたのはお前のおかげと言ってもいい。好きなだけ使ってくれ）

それは本当ですかっ！ユウ。以前ヒカルにやらせてもらっていた時は、少し話題に上ってしまったていろいろありましたからねえ。それに塔矢行洋とのあの一局。あれは私のかげがえのない思い出となりました。またあのような者たちと暮が打てるなんて、考えただけでもわくわくしてきました。

その言葉を聞いたユウが、何かを思い出したかのように、「あ、そうだ」という。

（お前、進藤名人のことやたら気にしてるけど、なんなんだ？なんかあったのか？）

そういえばユウにはまだ話していませんでしたね。いいでしょう。お話ししましょう。

以前、私が身を宿していた男、進藤ヒカルとの思い出を・・・

（ええええっ！お前、昔は進藤名人に憑りついていたのか。なるほどな、だからやたらと進藤名人のこと聞きたがってたわけだ。それに指導碁も・・・）

はい。ヒカルとの出会いはあなたと同じような感じでした。ヒカルのおじいさんの家の倉庫の碁盤に宿っていた私にヒカルが気づいたのです。

（まあ、似てるっちゃ似てるな）

それから、彼に私は碁を打たせてほしいと頼みました。彼は宿題をするならという条件で私に碁を打つことをさせてくれると言ってくれたのです。

それから、私たちは、ある碁会所へと向かいました。そこで出会ったのが塔矢アキラです。

（塔矢アキラ・・・ああ、あの進藤名人と期待のツートップスって言われてるあの）

そうです。私は塔矢アキラと碁を打ちました。彼がまだ小学生の頃です。しかし、その強さはあのヒカルが作った碁会所にいるメンバーでもはが立たないでしょう。それほどまでに彼は圧倒的な力を

持っていた。

（つてことは、お前、負けたのか？だつせゝ1000年以上生きてるくせに小学生一人にもかてねえなんて）

一人で大笑いをするユウ。それにいらつときた佐為は頬を膨らませながら

負けるわけないじゃないですかああ。あなたこそ、私の1000年をなめ腐っていますねえと怒って暴れた。そしてすこしの間ユウの大笑いと佐為暴走が落ち着いたところで佐為は再び説明を続けた

私はその碁に勝ちました。それから彼はヒカルに執念を燃やしていた。多分、負けたことが悔しかったのと同時に疑問だったのだでしょう。どうしてこんなやつに負けたんだ、と。

（え、じゃあ、進藤名人つてその時碁のこと、俺と同じで知らなかったの？）

ええ、まったく。ほんと、あなたとそっくりですね。ユウ

センスを広げ口に当てて、微かに微笑む佐為。そんな佐為にユウも冗談交じりに

（一緒に住んじゃねえよ。俺は俺だ）と言り返した。

それに佐為も　そうですね、とだけ言って再び説明へと話を戻す。

そして、再び塔矢アキラとの対局。あの時は彼を一刀両断にしていきました。

それからです。ヒカルも碁に興味を持ち始めたのです。私が打つてのを見て、楽しそうに思ったんでしょうかね

そんなあるとき、ハゼ中の文化祭に行った時でした。私が碁の出し

物をやっている場所を見つけて、ヒカルにそこへ行ってもらったのです。

(それで?)

佐為の話に興味を持ったユウは、どんどんいすから身を乗り出して佐為に話を早くしろと促す。

そこでは、詰碁というものをやっておりその詰碁を解いたら景品がもらえるということで、私たちはそれを解きました。そして、最後の一問を解こうとしたときに一人の不良男、加賀に出会いました。彼は、私たちが解いてきた中で一番難問であったその問題をいとも簡単に解いてしまったのです。

(お前、手こずったのか?)

再び、にやにやししながら、尋ねるユウ

そんなわけありません。あんなもの私の手にかかれば一瞬で解けます。ヒカルは、その男につつかかっていたいきました。なにすんだよ、と。それで、ヒカルのある言葉がきっかけでその男と勝負することになったのです。

(また、どうせかったんだろ?)

いいえ、負けました

思わずずっとこけるユウ

(負けたのかよっ！おまえ強いのか弱いのかよくわかんねえな)

あれは、ヒカルが打ち損じをしたからです。決して私のせいなどでは・・・あつたかもしれません。私はあの時ヒカルにまだいけると言ってしまったのですから

(それで)

その、碁を終えた後、加賀はヒカルに中学生の囲碁大会に出るよ  
うに言いました。

(今更だけど、お前今進藤名人のいつの時代のことしゃべってるんだよ)

あ、言いませんでしたか？小学生。ヒカルが小学6年生の時の話です。すいません、何分慣れてないものですから。

(いや、待て待て、なんで小学生の進藤名人が中学生の碁の大会になんて出るんだよ。お前、その加賀っていう人に負けたんだろう?)

はい、確かに負けました。しかし、彼は私の強さを見破ったのでしょう。

そのことが、今になって考えてみれば威張れることだと思ったのか、妙に胸を張って鼻を高くする佐為

それで、その大会で、ヒカルはその生まれながらにして持つ才能を發揮することになります。

ヒカルはある一つの碁を見ていました。そして、その碁の石の位置がごちゃごちゃになってしまいました。そこでヒカルが、俺、並べようかといって全部の石をいったん端に寄せて一から全部何手あつ

たでしょうが、50手くらいを最初から並べてみせたのです。

(すげえ、やっぱり俺とは頭のつくりがちげえんだな、うん)

そんなことはありません。ユウ、あなたはうちかたがきれいです。だれもが惹かれる一手を打つことができます。

よく思い出して御覧なさい。初めにあなたのうち方を見たものは、みな一様にはじめは固まっていたでしょう。

(そうだったかなあ、まあ、あの中で比較的高年齢の俺が変な打ち方するのもはずかしかったから、ちよつとまねただけだよ)

それがすごいのです。ユウ、あなたは・・・

これから説教が来ることを予感したユウは

(あああああああ、もうわかった、わかったから、お前と進藤名人の話の続きを聞かせてくれよ)と言って話を逸らした。実際、話の続きが聞きたかったのも確かだ

おっと、そうでした。その碁を並べてしばらくした後には大会が始まりました。その大会、ヒカルは初めて自分で碁を打ちました。結果は散々でした。でも、ヒカルにとってはとてもいい経験だったと思います。最後の方は結局私が打ちましたけどね。

それから、小学校を卒業して、ヒカルは八ゼ中の囲碁部・・・もどきに入部します。

一瞬詰まる佐為。そのことに間髪入れずにヒカルが突っ込む。

(なんだよ、囲碁部もどきって。もしかして、八ゼ中には囲碁部な

かったのか。大会出てたのに!?)

それは、ヒカルが出てようやく人数がそろったのです。二人では部は作れないでしょう?それに一人は囲碁部ではなく、将棋部ですし

(なんだよ、それ。まあいいや、それで)

ヒカルはその囲碁部もどきで碁を打つのですが。そこで再び塔矢アキラの登場です。彼は、実力が高すぎるため、アマの手合い、つまり中学生の大会なんかにはではいけないと、そう親に言われているのです。

だから、塔矢アキラはヒカルが囲碁部に入ると言ったとき、すごく驚いていました。そして、ヒカルも、もうお前とは打たない、そう塔矢アキラに言ったのです。

(なんで?)

ヒカルはもうその時すでに、囲碁に目覚めていたのです。いつか私のように強くなつて、そして、そうなったとき、再び塔矢アキラと打とうと、そう思ったのです

(なるほどなあ、進藤名人もすごい人だけど、塔矢名人つて人もやつぱ子供のころからすごかったんだな)

それから、しばらくして、一人囲碁部もどきに入部者が現れます。彼の名は、三谷。そして、3人そろった囲碁部は再び大会へと出場することになります。

そしてなんとその大会になぜか、塔矢アキラが出ていたのです。ヒカルも私もあの時は驚きました。どうやら彼は、よほど私と戦いたかったようです。それにヒカルも初めはアキラの望みに答えるため

に私に打たしてくれる気でいました。

しかし、対局が始まってしばらくしたとき私が長考している間に、ヒカルは何か思ったのでしょうか。自分で打ち出したのです。しかし結果は……

（負けたんだな、それもボロボロに）

そうです。ヒカルは悔しくて泣いていました。そして同時に勝った塔矢も泣いていました。悲しかったのでしょうか。自分がここまでして追ってきたものがこのようなものだったことに  
そして、その対局をきっかけにしたのかは知りませんが、彼はその年のプロ試験に出て、プロになります。

（ええっ！塔矢名人ってその時まだ中学生なんじゃ）

はい、別にプロになるのに年齢制限の上限はあっても下限はありませんから

それから、ヒカルも対局に対局をかさね強くなっていきある時、院生に行くことを決意します。

（院生？）

プロになるための塾のようなものです。

そして、ヒカルは合格して院生となります

（院生って試験あんの？）

はい。私も試験があるとははじめ思っていませんでした。それで、院生となって、ヒカルはまた別の仲間の伊角や和谷に出会います。そして、一年後ヒカルもプロ試験を受けます。

(どうせうかつたんだろ?)

ご名答。受かりましたよ。でも大変な苦勞があつたんですからね。

(まじかよ、すごいな)

プロになったヒカルは、まずプロになったら必ず行われる新初段シリーズというので塔矢アキラの父、塔矢行洋と対局することになります。

(塔矢名人のお父さんもつよかつたの?)

私と同じか、それ以上に

(へえ)

私はそこで、わがままを言ってしまいます。塔矢行洋と打たせてほしいと。当然プロになったヒカルには自信もありますし、売ってみたいという気持ちもあつたでしょう。ですが、私はどうしても打ちたかつた。

(どうして?)

私はヒカルがプロになったときから感じ始めていたのです。私の中の止まっていた時計が動き出したことに

(へ?なに、どういうこと)

1000年も幽霊として私が存在する理由ができ始めてしまった、

と言ったところでしょうか。つまり、時間が進んでいくなかで人間が永遠に生きられないように、時間が止まり永遠だと思っていた私の時計も動き出してしまったのです。

（まあ、つまりは消える予感がしたってことだな）

だから、私はわがままを言って、塔矢行洋と打たせてほしいと頼んだのです。最後の最後でヒカルは折れてくれて私に打たせてくれた。でも、中押し勝ち以外認めないという高度な条件付きで

（それで、かったの？）

急ぎすぎて負けました。勘のいい男です。私が誘っていることを見破ってゆつくりと構えて打ってこられましたからこちらに中押しできるすべはありません。

（そっかあ）

そのあとも、私はできるだけヒカルに指導をと思いましたが、ヒカルは相手にしてくれませんでした。

そんなとき、塔矢行洋が心筋梗塞で倒れたのです

（えっ！その人って佐為のことコテンパンにした人だよな、だいじょうぶだったのか？）

はい、幸い命に別状はなかったそうです。でも安静を取って一週間入院でした。そして彼は入院している間ひまだからということ  
でネット碁を始めます。

そして、それを知ったヒカルが、この前条件をだしたことを悪く思

ったのか、ネット碁で勝負したい友達がいると行って私のことを言ってくれたのです。あの時は本当にうれしかった、と同時に悲しかった。

そして、ヒカルに気を遣わせている自分が許せなかった。

そして、本当の塔矢行洋と私の勝負が始まります。

(で、結果は?)

私の反目勝ちです。そしてそのあと、私は消えました。多分、私の最後の役目というのが塔矢行洋との戦いをヒカルに見せることだったのだと思っています。

(なるほど、これでようやく見えてきたぜ。進藤名人のことも、塔矢名人のことも、それにお前のことも。んで、お前は進藤名人に会いたいのか?)

はいっ！是非

もしかしてと期待に胸を膨らませる佐為。顔がだんだんにやつく。その状況にユウもニイと笑い

(俺も、進藤名人に興味が湧いた、取りに行くか、5連続チャンピオン)と答えた。

はいっ！ありがとうございます。

両手を上にあげ万歳の構えを取って大喜びする佐為。

(あ、あと佐為)

何でしよう？

(今回、お前が消えることはない)

どうしてですか？

(俺はどれだけ頑張っても囲碁に興味はもてんっ！)

それは、それで悲しいです。

ヒカルとの思いで・・・(後書き)

ヒカルの暮の説明、要約がへたくそでござめんなさい。

## 進藤ヒカル

次の日、授業が終わった後ユウは昨日と同じ暮会所へと向かった。中に入ると、昨日と同じ受付の女の人今日は妙にピシツとしたスーツ姿で迎え入れてくれた。

「いらつしゃい、やっぱり来たわね。どうしてあの上のメンバーの子たちに勝ったこと教えてくれなかったの」

「やっぱりか、と思いつつユウはアハハと苦笑いをしてごまかした。

「そんな事よりさ、お姉さん、どうして今日はそんなスーツ姿なの？」

「あ、これ？これはねえ、今日、あの子供部屋に棋院の人たちが来ていてね、特別対局をやっているのよ。いちおうこれでも私は受付だからね、さすがにそんな人たちがくるのに私服もダメかと思つて一応ここ結構いい建物だからスーツ着ても普通に思えるでしょ？」  
そういつて立つて全身をユウに見せる中原。しかしユウはそんなことには目もくれないでただ一つのこと、棋院の人たちのことを考えていた。

「ねえ、その棋院の人たちって俺でも対局できるの？」

「ええ、できるけど。あなたはダメ。今日はあなたのために特別な人を呼んだんだから」

「特別な人？」

同時に佐為も 特別な人？と二人してはもりながら同じことを口して、首をかしげた。

「そう、特別な人よ。こっちに来て。案内するわ」

そういつて始め来た時のように今度はまた違う部屋へと中原はユウを案内した。

「ついたわ、この中で少しの間待ってて」

そういつて中原が案内した部屋はどこからどう見ても、進藤ヒカルの個人部屋だった。

プレートにご丁寧に進藤 対局室と書かれている。おそらくは進藤名人がだれかと打つ時に使う部屋なのだとユウは思った。

「ねえ、もしかして、特別な人つてもしかして・・・」

「そうよ、進藤名人よ」

笑顔でそう答える中原。その答えを聞きユウも

やっぱり、こりや思わぬラッキーだとユウは心の中でガッツポーズ。佐為もユウの周りでワイワイと大はしゃぎしていた。

「私が、棋力を知らない天才小学生がいるって言ったらその子と一度打ちたい。きたらぜひ俺の部屋に招待して、俺に連絡をくれ。できる限りすぐに向かうってかなり喜んでいたわよ。よかったわね。ふつつそんなことありえないのよっていつてもあなたもかなりありえないけど」

微笑しながら言う中原の言葉に佐為は

もしかしたら、ヒカルは私のことに気付いているかもしれませんが、  
と言

ユウも（ああ、そうかもしれないねえな。そしたら心置きなく対局できるなあ、佐為）と答えた。

「それじゃあ、連絡してくるから」といつて中原はいったん部屋の前を後にした。そしてユウ達はへやの中へと入った。

中に入るとその部屋の中には、いくつもの賞状と、優勝カップがあり、真ん中に居座るように碁盤が鎮座していた。

「すげえ、これが進藤名人の部屋かあ。こんなに賞状が、なあ見てみるよ佐為。この進藤名人のうれしそうな顔。なんかどれをとつてもおんなじようにその時の最高の笑顔つてかんじだよなあ」

その言葉に答えるように佐為は

ええ、進藤ヒカルとは、そういう男ですから  
と言った。

しばらくの間ヒカルの部屋を堪能していると、連絡を終えた中原が戻ってきて

「進藤名人、あと10分で帰るから、お願いだから帰らないでって言っと思ってだつて。なんかすごい勢いで電話切られちゃった。よっぽどあなたと会いたいよね、彼」

その言葉を聞いて、ユウと佐為の予想は確信へと変わった。

そして、ユウは短く「ありがと」とだけ言った。

佐為はもうヒカルと会うのが待ちきれないといったようにそわそわと部屋をあっちへこっちへとせわしなく動いている。

かというユウも昨日の話で少しだけ進藤名人に興味を持っており、落ち着いてはいられなかった。

その姿を見た中原は

「あなたたちもずいぶんとそわそわしてるわね、まあいいわ。私は受付に戻らなきゃならないから、ものはこわさないようにね。」

そういつて再び中原は受付の方へと戻っていった。

その後の二人はもう進藤ヒカルのこと以外何も考えられないかのようにならそわそわとし、そして待った。

ちょうど10分ほど経過したとき、ドアが開く音がした。

そして、そのドアの向こうから、身長は160?強くらいの大人の男性にしては若干低めの身長で、髪型は少し変わった前髪は金髪、後ろ髪は普通の黒という賞状やトロフィーと一緒に飾られていた写真に乗っていたその男が姿を現した。

あらわれるや否やすぐにユウのことを指差して

「お前か、棋力もしらない状態であの小学生たちをコテンパンにした天才小学生っていうのは」といった。

さすがのユウも大の大人、それも話には聞いていても初めての相手だったこともあり、かなり緊張して

「は、はいっ!」とすこし張り切ったような声を出した。

その傍らで佐為は

「おー、ヒカル大きくなりましたね。でも私の方がまだ身長は上で

すね。それに声もだいぶ低くなりましたね。

と大はしゃぎ、心は興奮状態なのだと言ウは思っていた。しかし佐為は心の中で、やはり私の姿はもう、ヒカルの目には映らないのですね、とひそかにまだ見えるのではと思っていた期待が裏切られて悲しい気持ちにもなっていた。

「そんなに固くなるなって、な。逆に俺が堅くなっちまいそうだよ。そうだ、菓子食うか、一応と思って買って来たんだけど、どれが好きかわかなくてさあ、ポテチとか、好き？」

一瞬、あまりのノリの軽さに驚いた言ウだったが、彼の少年時代を佐為からあらかじめ聞いていたおかげで、案外すんなりとうけいれることができ「あ、よく家で食べます」と普通に対応することができた。

その言葉を聞いてヒカルも心底安堵したように胸に手を当てふうと息をつき「良かったあ、なんか最近の子供の趣味とか俺時々わからない時あるからさ、もしかして嫌いな子だったらどうしようって思ってたんだ」と自分の気持ちを言ウに話した。

言ウも、その進藤のノリの軽さにすっかり緊張もほぐされ

「いや、それは明らかに進藤名人じゃなくて、そのこどもの味覚がおかしいでしょ。ハハハハ」とすっかり普段の調子に戻った。

「あ、俺のことはヒカルでいいよ。いやならヒカル君でもヒカルさんでもかまわねえ。俺もお前のことはえっと・・・」

「あ、言ウです」

「俺はお前のことは言ウって呼ぶ。だから

その進藤名人っていうのだけはやめてくれ。それが嫌で俺は本因坊戦も王座戦も調子狂うんだよ。これ勝ったら進藤本因坊とか言われたらってそうぞうしたらぞくぞくしちまって」

その言葉を聞いた佐為が

「こら！ヒカル。そんなことで集中力を切らしてどうするんですかっ！冗談、それは冗談なんですよねっ！

とヒカルの後ろでかんかんになって怒っていた。しかしその言葉は

ヒカルには届かない。

佐為がそのようなことを自分の後ろでしていることすら知らない。佐為は怒っていてさらにさみしさを感じた。

そのことをよそにユウとヒカルは話のうまがあったのかどんと盛り上がったいった。

しばらく話で盛り上がったあとにふとヒカルがユウにこんなことを聞いてきた。

「ユウは、最近霊がみえるようになったとかそういうの無い？」

その言葉を聞いたとき、ユウは来たっ！と思った。会話で盛り上がりつつすこし思っていたのだ。

その質問にあらかじめ考えておいた答えで返す。

「いますよ。あなたの後ろに。あなたの探している霊が」

その言葉を聞いて一気に後ろに振り向くヒカル。その顔を見ておいヒカル私はここですよ、と手を振る佐為。しかしヒカルにそれはやはり見えない。ヒカルははあ、とため息をつきもう一度ユウの方に振り帰る。

「じゃあ、お前もしかして・・・」

「はい、見えます。藤原佐為という、平安時代の碁打ちの霊が」

「やっぱりそうか、なんとなくそういう気がしたんだよ。棋力をしらずにあの小学生を一騎当千するなんて、アイツでもいねえと無理な話だ。でも残念だな、もう俺にあいつは見えねえんだな。まだ後ろにいる？」

「ええ、いますよ。今も必死にヒカルさんに泣きついてます。どうして私のことが見えないんですかあヒカルうって」

「あいつらしいな。なあ、打たないか。一度俺と」

「佐為とですか？いいですよ、佐為も喜んでますよ」  
「いや、佐為には悪いけど打つのはお前とだ、ユウ」

## 目覚めるユウの才能

「打つのはお前とだ、ユウ」

ヒカルは知りたかった。どうして佐為が自分ではなくユウの前に姿を現したのか。どうして佐為の存在を知ってなお自分は佐為のことが見えないのか、というより、なぜ佐為は再びここへと戻ってきたのか、その答えがユウと碁を打つことで答えが出ると思った。

「いや、でも俺、全然、碁なんて知らないし・・・」

ユウは佐為と出会って初めて碁を知ったような自分にまだ打てるわけがない。そう思って必死に止めようとした。

最悪だまって佐為に打たせてもいいか、と一時はそう考えたが佐為にヒカルなら私が打っていたら一発ではれてしまいます。といわれ、てしまいさらにその思いは強くなった。

しかし

「いいから打てっ！・・・いや打ってくれ」

知りたいと焦る気持ちが前にでて思わず荒い言葉がヒカルの口から出てしまう。

その態度にユウもドキツとして硬直した。

しばらくの沈黙が続いた。

最初に沈黙を破ったのは佐為だった。

ユウ、ヒカルと打ってあげてくれませんか？

（でもよお、俺ほんとに碁なんて昨日初めて打っただけだぜ。それにまだルールとかも全然しらねえし）

大丈夫です。その辺はヒカルもわかっているはずですよ。

（そうかなあ）

そうです。大丈夫。ユウならできます。

（ほんとか？ならやってみようかな。でも負け勝負をするのって気持ちいいもんじゃないぜ）

なぜ負け勝負だと思うのですか？

（そんなもん、向こうは現役でプロしてる。しかも期待のツイートとか呼ばれてるくらいに強者なのに対して、こっちは昨日初めて打ったような新参者だ。勝てたらそれこそ俺は天才だ。）

じゃあ、天才であることを証明するためにも、一度。ほらっ、はやく

今まで自分が座っていたところからせつせと動き盤上をセンスでさす佐為。

その姿に苦笑しながらもわかったよと打たないことを諦め打つことを決意した。

「打ちましようか、ヒカルさん。でも俺昨日初めて碁を見ただけなんであんまり期待はしないでくださいよ」

「わるいな、無茶言つて。」

「いえ、せつかく期待のツイートツプスの一人と打てるんですからこちとしては光栄ですよ」

そういつて二人は真ん中に鎮座する盤上へと足を運んだ。

「置石はいくつがいい？好きなだけおいでくれ」

その言葉を聞いた瞬間佐為はしまったあといった様子で縮こまった。教えていなかったのだ。どうせ自分が打つからそんなものはいらないとそう思つて。

そんな佐為をユウは一瞬睨み付けた。そしてしぶしぶそれがなにかヒカル本人に聞くことにした。

「あの、置石つて・・・」

「ああ、置石つていうのはハンドのこと。最初からいくつか置石を置いておくとちょっとは勝ちやすくなるだろう？」

「なるほど、じゃあ、ココと、ココと、ココにっつと」

そういつてユウが置いたのは右上隅の小目、左下隅小目、そして左下桂馬という風においた。昨日最後打った局で佐為の初めの三手を

再現したのだ。

それを見たヒカルは苦笑しながら

「ごめん、説明し忘れてたな。置石っていうのは基本置く位置が決まっているんだ。」とその三つの置石を本来おくべき位置へと持って行った。

その姿にユウも小さく「スイマセン」と謝った。

置石3つをすべてしつかりとした位置におきおえてヒカルが

「三つでいいの？」と尋ねたが

ユウはこれでも多かつたかなと思うくらいで

「もう十分です。」と言って準備完了。

昨日と同じようにお互いに「「お願いします」「」と言って碁が始まった。

碁が始まった瞬間、ヒカルの目は真剣な目へと変わり、盤上へと注がれた。

そして、はじめの一手をうつ。

その真剣な表情を見たユウは自分もやれるところまでだけやってみようと思いつき、ヒカルの置いた右上隅の小目の位置につけるようにして石を打つ。

そのうち方を見た瞬間、ヒカルの手が止まる。今のうち方は、いい。すごくきれいだ。あの時見た塔矢の父さんみたいだ、と感じていた。しかし、ヒカルはその感動を振り切るように頭を振る。ダメだ、今は対局に集中しなければと再び盤上に目をやり次の手を考えた。

しばらくたって、中盤に入ったとき驚くことにヒカルはユウにかなり苦戦していた。

なんなんだ、ユウのこの碁は。このうち方、佐為の力を借りてるとも思えない。でもなんだろう。こっちの動きはすべて見透かされて

いるような、そんなうち方をしてくる。

自分が打とうとしているところを徹底的に潰している。これでもか、と見ている人にとっては意外だろうというようなところに打つても、それを読んでいたかのように次の一手は俺の展開を邪魔するようなところをついてくる。

しかし、強いかと思うとそうでもない。かなり抜けている。一つアゲハマにした時に

えっ！、あそうか、囲まれてたのかと素人的なミスの連発。

もしかして、こいつ。盤を見ているのではなく、俺の心を見て打っているのか

次の一手をヒカルが打つ。またヒカルが思っていたような展開にさせないような位置に打たれる。

またヒカルは考え込む。

そんなヒカルの苦戦を知らないユウは

何をそんなに考える必要があるんだろう。そして、なんでヒカルさんの打つ碁はこんなにも近くに感じるんだろう。

なんだか、すべてが見えてしまう。ここに打つだろうという道が

一方後ろから見えていた佐為もこの碁を食い入るように見ていた。

すごい、碁を知らない者でここまで打てる人間は本当にいるのでしょうか？

ヒカルには悪いですが、これは明らかに考えの面でユウの方が一枚いや、2枚は上手うわてを行っている。ユウは全てヒカルの手を読んでい

る。まさしくこの子は天才。神に選ばれた存在なのかもしれない。

ただすこし惜しいのは、打つ道が見えていてもそれに対する対策の一手が甘いこと。さらに自分からの読みがないこと。自分がこうしてやろうというものはなく、相手の手に対する甘い封じ手だけを打っている。だからアゲハマにされることすら読めない。

ただ、封じることしかしていないから。

考えに考えたあとにヒカルが打った手にたいしてまたユウが打つ。

しかし、今度もまたヒカルの石の道をふさぐ。しかし、ヒカルも黙

つてはいない。次の一手で一つをまた自分のアゲハマにする。その光景をみたユウは佐為の思うとおり再びマジでっ！と驚きの声を上げていた。

対局は大詰めを迎え、ヒカルがまた次の一手を繰り出す。

それに対してユウもその道をふさぐような位置に打つ。そして終局を迎えた。

目算を始める。結果はヒカルの3目半勝ち。

石を片付けて互いに「「ありがとうございました」「」といって対局は終了した。

ヒカルと佐為に堂々とユウの才能を見せつけて

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9957z/>

---

ヒカルの碁 神の一手を極めし者

2012年1月6日13時45分発行